

平成30年度 第2回 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 平成30年9月12日（水）午後7：00～午後9：20

◆開催場所 東近江市市役所新館 311会議室

◆出席者

市民協働推進委員 小森秀樹、塚本喜久藏、辻薫、森下瑠美、大橋正徳、小島なぎさ、
園田由未子、大林恵子、藤澤彰祐、山本十三、奥田新悟、井上文子
（欠席：深尾昌峰、小嶋一浩、金子泉美）

事務局 まちづくり協働課 曾羽、久保、込山
（傍聴者：0人）

◆議事

- 1 『共に考え、共に創る わがまち協働大賞』について
- 2 協働のまちづくりを進めるための取組について

◆会議録

開会

【事務局より開会のあいさつ】

皆さん、こんばんは。第2回の市民協働推進委員会に御出席いただきありがとうございます。前回の委員会からちょうど2ヵ月、この間、酷暑、台風、地震など各地災害が起きました。先日の台風21号では東近江市で亡くなった方がおられ、市内のコミュニティセンターでも、屋根が飛んだり倉庫が壊れる等の被害がありました。

前回のワークショップでは、それぞれの立場から御意見をいただきました。また、さっそくわがまち協働大賞の審査も御協力いただき、ありがとうございました。本日はその結果を踏まえ、協働のまちづくりの素晴らしい事例を表彰できますよう御審議いただきます。また、後半は委員会で御議論いただくテーマについて、皆さまのお知恵をいただきますようお願いいたします。

【副委員長あいさつ】

皆さん、こんばんは。大きな台風被害の中、来ていただき安心しております。本日は委員長が急用でお休みということですが、協働大賞の審査と協働のまちづくりへの取組という重要な案件がありますのでよろしくお願いします。最近では協働という言葉があちこちで使われておりますが、地域と行政など、横のつながりを大切にしていけないといけないのだと思います。協働をいろんなところに拡げていくことで東近江市の良さが出てくると思いますので、皆さん御協力をお願いします。

【協働大賞について】

*選考については非公開

*ヒアリングについて（資料4）、市民投票と中学生が選ぶ協働大賞について（資料5）、最終選考（資料6）の説明

1次選考の結果、応募のあった18事例のうち10事例が1次選考通過。

【協働のまちづくりを進めるための取組について】

* 前回ワークショップの内容の振り返り（資料7）、〇〇自治会の運営例（資料8・非公開）

* 今年度市民協働推進委員会で議論していくテーマ“地域コミュニティの存続”

（副委員長）

地域のコミュニティの存続というのは一番身近な課題でもありますので、課題の洗い出しや必要なことなどを話し合っていきたいと思います。

（事務局）

多くの人が地域のコミュニティは大事だと感じていますが、担い手の問題や高齢化によって見守りや支え合いが必要担ってきている中で、地域のつながりが薄くなってきていると感じている人もたくさんおられます。自治会が一番身近なコミュニティなので、崩れてしまうと地域の未来を見通すのが難しいと思うのですが、一方で、地域はしんどいという意見もあります。なんとか存続はしてほしいと思いますし、新しい形であったり必要とされる理想の形で地域を守っていかないといけないと思うのですが、何が問題なのかというところがとっかかりだと思います。みなさんどうお考えでしょうか。

（委員）

資料を見ると、私のところも似たような内容になっています。昔は農業中心に生活されていたのですが、今は核家族や高齢者の1人世帯など、構成の違いがあって参加するのが難しいという問題が出ています。ですので、核家族や1人でも参加できる環境や、自治会が取り組む内容も検討しないとイケない時代になっていると思います。どうすれば自治会に参加しやすくなるかという検討が必要だといつも感じています。私のところでは、できるだけ無理をしない、特にお父さんお母さんといった保護者の方に協力してもらうときは、年に1回でも良いよという柔らかいスタンスでやっています。そうすると、来年もしようかという気持ちになってもらえるようです。

（委員）

確かに、最近自治会のあり方などが問題視されてきて、ようやく先程のような考え方をしてくださる方が少しずつ増えてきたと思います。10年20年前くらい前にはそのような空気がなく、私は母子家庭で育ったのですが、子どもの頃はまったく自治会に入れてもらえませんでした。子どもが生まれて引っ越しをして、始めて自治会というものに直面したときに、主人は仕事で1年のうち半分以上家にいない状態だったのですが、おかまいなしにあれこれ役など頼まれました。新興住宅に入ってきて、親元もなく子どもを預ける先も分からないということも考えてもらえず、自治会がとても怖いイメージが未だにあります。少しでも参加する気持ちになってもらえませんかということ、どう発信していくかは大きい気がします。IターンやUターンで帰ってきた人が、地域に馴染めなくて出て行ってしまうということもよく聞きますが、とてももったいないと思うので、上手くやっていく仕組みを今いる人達で考えないとイケないのではないかと思います。

（委員）

私は古い集落に住んでいるので、役を受けると大変で、ましてや自治会長になるともっと大変です。長ではない役員にあたった人が、仕事の内容や家庭環境で出られない、出来ないから

しないという方が増えれば自治会はやっていけません。そうすると自治会長が全部しないといけなくなります。なので、自治会内の役員さんが役目を果たさないと、一般の住民さんもみんな参加しなくなって地域がつぶれてしまいます。自治会の中でできる仕事だけでもということですが、どうしてもやらなければいけないこと、地域の人々の命と財産を守るという最小限度のことだけでも非常に多いので、1人ひとりの意見を聞いていると動かないんです。大多数の意見に従ってもらわないとやっていけない、従えないのであれば自治会を出てもらわないと仕方がなくなってしまいます。自治会が関連しないとできない地元のことは非常に多いので、これを動かすには人任せではできません。役があたった人にはやってもらわないといけません。

(委員)

私は出来る範囲のことはやりますというスタンスで参加してきましたが、それでもしんどいという引越される方を見ていると、それが地域として本当にプラスになるのかなと疑問に思いました。せっかくお金を貯めて建てた家を手放してでも、この地域では生活ができないと言って出て行かれる地域のあり方が、東近江市として良い方向に作用していくとは思わないので、その部分は考える必要があると思います。

(委員)

私も自治会の会長をしているのですが、昨年自治会長向けの講演会がありました。その中で、「女性が自治会の役員になっていない。自主防災等の役員を決めても男性ばかりで、日中家にいるのは女性がほとんど。」という話があり、なるほどなと思いました。また、高齢化が進んで子どもが少ない状態で、昔は青年団という組織があったが、今は誰も入らなくてなくなりました。口では何でも言えますが、自分の好きなことはするけれど、実際に自分の生まれたまちをどうするかと聞かれると言葉に詰まってしまうことがほとんどです。どの組織も運営が難しくなっているので、みんなでどうしていくかという議論は避けられないし、私は女性に入ってほしいと思っています。

(委員)

私が住んでいる集落でも同じような悩みを抱えていて、女性の委員を入れようという話を2、3年前から始めました。そこで、地域に住んでいる人達に自治会の何かしらの役を持ってもらおうということで、まちづくり応援隊という仕組みを作りました。例えば、敬老会の準備だけ手伝いますとか、毎週やっている宅老所に何日か行きますなど、手伝えるメニューをいくつか作って、高校生や大学生といった若い人も参加できるようにしました。いろんな人が関わられるようにすると良いと思いますし、その中で、若い人や女性の方も自治会役員の大変さや現状を知ってもらえれば、何か変わることもあるのかなと思います。

(委員)

質問ですが、住んでおられる自治会の役員決めはどのようにされているのでしょうか。

(選挙をする、順番が決まっている、選考委員で決めるなどの意見が出ました。)

自治会だけではなく、いろんな団体で担い手の問題があると思います。私の地区の子ども会連合会では、現会長が次の会長をお願いをしに行くという方法を抽選で決めることに変えたのですが、抽選にすると誰になるか分からないということで、会から抜けたり辞める人が増えました。私も何年か団体の会長をしていたのですが、会長を終えるときに「1人が何年もやっていると次のなり手がなくなる。ちゃんと任期を決めていかないといけないよ。」と言われました。前回の委員会でも担い手の問題が出ていて、どうしたら良いか疑問に思っています。

(委員)

私は守山市民で、夫の親が今年自治会長をしているのですが、会議や配りものなどたくさんあって、すごく大変そうです。そのおかげで私たちは暮らしているのだと思うのですが、話を聞いていて楽しくない、つまらないです。本当に必要なことをしてくださるのですが、37歳の女性である私が、男性社会やつまらなさを感じるのは、同じ世代の女性をたくさん集めて話をしても同じような意見だと思います。いろんな関わる場面、ステージさえ作ってもらえれば、自治会に協力していきたいという気持ちは誰でも持っています。ただ、仕事をしていて火曜日しか休みがないので、関わるチャンスがあまりなくて申し訳ないと思っています。今後自治会を存続していくのであれば、引け目を感じないステージを作っていくということが必要だと思います。

また、そもそも自治会は住んでいる人達の組織なので、住んでいる人達が集まって、どんなまちづくりをしたいのか、どんな地域にしたいかということをお話することからしないと、既存の慣習にとらわれていると私にとってはつまらないものです。資料の例のようなたくさんの方の取組など、伝統や自治、規律を守ってきた大事な要素が農村の今の風景を保っていると思うのですが、住んでいる人の気持ちが一番大事なので、今後も存続させるものを腹を割って話さないといけないと思います。どの世代の感覚も取り入れながら、本当に必要か、今後10年20年先に必要なかということをお話することが優先だと思います。どこだったか、集落の人達に今一番まちづくりに必要なことは何かというアンケートを取ったら、意外にも防災が1位だったので防災バーベキューをした地域がありました。そうすると今まで自治会の行事などで顔も見なかった人達がたくさん集まってきて、参加が多かったという事例を聞いたことがあります。そういった楽しみも入れていかないと、行きたくない場になりかねないと思います。

(委員)

自治会の行事や会議などには祖父や父が参加しているので、私自身は普段自治会に関わる機会は少ないのですが、先日、地蔵盆で当番が当たって、久しぶりにお菓子を子どもたちに配るという役で参加をしました。最近、近所に新しい住宅ができたのですが、家を建てる時に自治会に入るという前提で入ってこられているという話を聞きました。ただ単に住みやすそうだとか便利だとか土地が安いというだけではなくて、これから先ずっと住んでいく中で自治会ということをお視野に入れて引っ越してこられているということは大事だと感じました。

地蔵盆の日は台風だったので次の日に延期をすると決めて、延期のお知らせやお供え物をどうするといった連絡を近所のおじいさんが配ってくださいました。また、当番3人で20人の子ども達にお菓子を配るのはすごく大変だったのですが、中学生や子どもたちのお母さん方が手伝ってくださったので、慣れている人だけではなくて、面倒だとか大変そうというイメージではなくて、お菓子がもらえるというような楽しいイメージを持っている世代がずっと続いてほしいなと思います。また、私の年代は子どもが少なくて地元に残っている人もほとんどいないので、穴が空いてしまう世代をどのようにつないでいくかということも気になっています。

(委員)

私は、東近江市の中でもとても大きな自治会に住んでいて、たまたま父が自治会長にあたったことがあります。人数が多い分仕事も多くて、配布物を分けるだけでも家族みんなで文句を言いながらやっていた覚えがあるのですが、父が自治会長をしたことで、初めて自治会とのつながりができました。それまではまちの清掃等には参加するのですが、自治会と関わることは

ほとんどありませんでした。人数が多いので自治会としてのまとまりはないのですが、コミュニティを作っていないといけないという考えはありました。そんな中、父が初めて空き地にかまどベンチを作って、余ったレンガを使ってピザ窯も作りました。子どもが多い地域なので、ピザを焼いたらみんな来てくれるかなということで取り組んだのですが、それから毎年、防災の日にピザを焼いて、子どもも親も集まってもらえるようにすると、100人くらいが来てくれるイベントになりました。準備は大変ですが、何かあったときには炊き出しができるという話をしたり、その横に畑を作って芋掘りができたり、少しずつ集まる場ができてきています。こうした楽しみを見つけながらつながりを作るというのも大切だと感じています。

(事務局)

これまで市民協働推進委員会では、市民活動のNPOやまちづくり協議会などの支援といったことをテーマにしていました。今回自治会をテーマにしたのは、自治会はしんどい、面白くないという意見が出ていましたが、一方で市民の暮らしの基礎の部分ですので、そこをなんとかしないとイケない状況にあるからです。自治会をどうすれば良いかという相談もたくさん来られるようになり、行政としても危機感を持っているのですが、簡単に解決できることでもありません。自治会内だけではなくて、若い人は自治会のことを知らなくてもこのように思うとか、NPOや市民活動の立場から自治会とどう関わっていけるかとか、それぞれの立場から新たな視点の議論をこの委員会でしていただけるとありがたいです。

【事務連絡】

- *わがまち協働大賞の協賛について
- *9月24日開催の協働ラウンドテーブル「まちのわ会議」の紹介
- *東近江三方よし基金について
- *次の開催日は、11月7日の午後7時から

閉会